

## 学校飼育動物対策を巡る獣医師への期待

無藤 隆

現在、幼稚園・小学校などでは、幼稚園教育要領および学習指導要領に基づき、学校において動物を飼育し、自然への関わりの教育、命の教育、理科の教育などに役立てています。子どもの家庭での状況を見ると、マンション住まいとか、共働きであるとかで、ペットを飼えないことも多く、動物に触れる機会は貴重なものとなっています。とりわけ、ウサギ、ハムスター、モルモットなどの小型の哺乳類への接触は他の動物では得難い命の実感を強く持たせてくれるものであると思います。

ところが、実際に学校で動物を飼育するとすると、いろいろな困難が待ちかまえています。一つは、飼い方がよく分からないとか、手間が掛かるということです。間違えた飼い方をしている学校を未だに見かけるのは残念ながら、学校現場の実態としてあるのです。

また動物の愛護を大事にする立場からの批判もあります。適切な飼い方をすればよいのではないかと思いますが、極論としては一切飼育することはいけないというような言い方すら聞かれることがあります。

第三に、親御さんからの懸念の声があります。鳥インフルエンザのニュースが流れるたびに、動物の飼育を取りやめる学校が出てくるのです。また子どものアレルギーへの配慮を求める余り、一切動物を学校内に置かないことを強く求める親御さんもいるようです。

教員側も熱心な一部の方を別とすれば、一般には消極的な姿勢です。上記のような要求や批判に応えるだけの知識を持たないということもあります。学力増進その他で多忙を極める学校の中で、動物の飼育の手間を掛けたくないという本音もあるでしょう。土日の休みや夏休みなどにどうしたらよいのかは確かに簡単に解決できることではありません。

では、学校で動物を飼わないことにしてしまえば、全ての問題は解決するのでしょうか。で

も、子どもが成長する間に、一切動物に触れないとか、動物の生態を知らないでいる、また命を実感する機会がないということで、本当にまともな社会人が育つものなのでしょうか。

だとすると、やるべき課題ははっきりとしています。何より、獣医師の助力を求め、科学的な根拠を持って、動物を飼育するやり方を定め、それを守っていくことです。また教員や保護者また地域の動物愛護に関わる方々に獣医師から説明をしてもらうことです。鳥インフルエンザは人間への感染はほとんど起きていないこと、飼育活動の前後に手を洗うといったことを励行すればどういった感染であれ防げることなどを丁寧に教えてもらえるようにするのです。

それと同時に、先行する学校の動物飼育の授業実践に学ぶ必要があります。単に学校のどこかに一部の子どもや教師がその世話をしているという程度では子どもによい影響は期待できません。皆で取り組み、しかも日頃から動物を世話して、動物の実態を知り、愛情を抱いてこそ、動物飼育は意味のある教育的体験になります。

そういった全ての活動の一つ一つに獣医師からのアドバイスは不可欠です。是非地域ごとに教育委員会と獣医師会が連携し、また個別の学校に置いては、医師が顧問となるのと同じように、学校獣医師という役が作られることが大事になります。学校の予算の乏しい中で、そのようなお願いは獣医師側の負担を増すことになるかもしれません。でも、将来、動物を愛し、人と人との関わりを大切にする子どもそして大人が、そのことにより少しでも増えるなら、十分に意味のあることではないでしょうか。

子どもと動物の未来、そして我々大人達が安心して老人になるためにも、是非、専門家としての支援を願います。

(「東獣ジャーナル」平成19年10月号巻頭言)

(白梅学園大学学長)